

うすらい

ことばとことばにならないもののあいだに

つづり010

awai より

目次

181. 朝のスキポール空港、そしてハーグの街
182. ライデンでシーボルトに想いを馳せて
183. 暮れる空に光る星
184. 「本物」になれなかった男
185. 学びの構造とメタファーに彩られた物語
186. 「いつかやろう」をいつやるか
187. 薄暗い列車に乗り込んで
188. マシンガンとリンゴ
189. 入国を拒む国の自動化ゲート
190. 意味を持たない音に揺られて
191. 海外の海外から
192. 二階建てバスからの景色を見ながらロンドンの渋滞を解く
193. レンブラントとキャプテンクックに向き合って
194. 異国での小さな望みと前提を書き換えるということ
195. 話を聞かれない男
196. 遅れたバスと漏れたオイル
197. 学びについての学び
198. 見ないという選択
199. 知っていると思っているところから離れてみると
200. 私が日記を書く理由

181. 朝のスキポール空港、そしてハーグの街

時刻は8時になろうとするところだったが、スキポール空港は既に多くの人で賑わっていた。土曜の朝というのはいつもこんなに人が多いのだろうか、それともバカンスに向かう人々だろうか。到着ゲートの前には「WELKOM」（オランダ語でwelcomeの意味）と書かれた大きな布と赤い風船を持った人々が集まっていた。布にはチェコの国旗らしき絵も書かれている。この人たちは、どんな理由で、どんな人を迎えようとしているのか。

オランダに来てもうすぐ丸11ヶ月が過ぎようとしている。その間、何度スキポール空港に来ただろう。日本、ドイツ、イギリスへと自分が向かうよりも多く、パートナーを見送りに来た。数えきれないほど出迎えと見送りをしても、そのときに感じる嬉しさと寂しさは褪せることがない。それはお互いが日々アップデートされて「知らない人」になり続けているからだろう。セキュリティチェックのゲートに向かう姿を見送り、相変わらず出迎えの人々で賑わう到着ゲートの脇を抜けて電車のホームに向かった。

空港の賑わいとは裏腹に、ハーグに向かう電車はガラガラで、駅に着いたときには同じ車両に1人しか人が乗っていなかった。珍しくすぐにやってきたトラムに乗り、出入り口近くの席に座り、電車の中で読んでいた本を再び開いた。家の最寄りの駅でトラムを降りると、駅よりもさらに静かな、土曜日の街がそこにあった。2019. 6.29 Sat 9:41 Den Haag

182. ライデンでシーボルトに想いを馳せて

昨日滞在していたライデンの街はちょうどお祭りのようで、普段も観光客で賑わう街中がさらに賑やかになり、街全体がアミューズメントパークになっているようだった。街中にあるいくつかの小さな広場にはメリーゴーランドなど移動式の遊園地のアトラクションのようなものが据え付けられ、通り沿いのレストランはこぞってテーブルや椅子を外に出し、人々はそこでビールを飲んでいる。運河に停められた大きめの船はレストランの一部となり、小さめの船でもパーティーをする一団があったり、家族でのんびりと過ごす人々がいたり、人々が思い思いの時間を楽しんでいる。ライデンの中心部を囲む運河は比較的幅も広く、両岸に停泊した船の間を、クルーズ（と呼ぶのだろうか）を楽しむ人々の乗る船が通り過ぎてゆく。卒業のシーズンでもあり、若い人たちがパーティーをしているのか

と思ったがそうでもない。おそろいのシャツを来ている年配の男性たち、白いドレスを着た女性たち、船乗りの格好をした男女、蛍光色のつなぎを着て歌う人々。何だかは分からないが、とにかくそれぞれの人たちがおのこの時間を楽しみ、そしてその楽しみが運河を、街を包み、呼応し合っている。

19時すぎにライデンに着いてすぐ、賑わう街中から少し出たところにあるシーボルトハウスを訪れた。世界史を専攻しなかったのでシーボルトに関する知識は「オランダから来ていた医者」というぐらいだったが、展示を通して「優れた医者だったシーボルトは、出島を出て病人を診察することを特別に許されており、診察料を取らなかったため、患者たちは感謝の気持ちを物に託して贈り、それがシーボルトのコレクションとなった」ということを知った。彼は日本のことを調べるようにという命令を受けていたと言うが、彼の収集した日用品から工芸品、動植物の標本に至る幅広いものたちの展示を見て、彼が日本文化に心底興味を持っていたことを感じた。そして「日本が開国した際には日本がその立場を守れるよう、ヨーロッパ各国の元首との間を取り持った」という説明文を見て「なんとありがたい。どうしてそんなに日本のことが好きになったのだろうか」と思った。さらに今しがた、「シーボルトが収集していた物の中に日本地図など当時日本から持ち出すことが禁止されていたものがあつたことから、長い取り調べを受けた末、1829年に日本から追放をされオランダに戻った」ということを知り、それから25年後の日本の開国の際になぜそんなに日本のために力を尽くしてくれたのかということにますます興味が湧いてきた。日本を離れてからもなお日本に関する研究を続けたシーボルトの想いは計り知れない。60歳を過ぎて再び日本にやってくることができたときに彼はどんなことを感じ、そのときの日本に何を見たのだろうか。ライデンにはライデン大学というオランダでも最古の大学と言われる大学があり、そこには日本学科がある。そのため、お店などでは日本語で話しかけてくれるか、「日本から来たのか」と聞いてくれる人も多い。私たちがオランダのことを想像するのは少し違う感覚で、彼らは極東の地のことを感じているのではと思う。

シーボルトハウスを出て小さな店の並ぶ路地を進んだところ、以前ランチをしたことのあるお店の近くに出た。そのときはこじんまりとした店内が人で賑わっていたが、閉店時間が近いせいか、開け放ったガラス戸付近の席に座る人々がワインやビールを飲んではいながら店内に人はいない。人の間を抜けて店内に入り席に座るとすぐに店主らしき恰幅のいい

男性が、「新鮮な素材で作っているので今日は既になくなっていくものもあるし、店は18時までだがそれでいいか」と聞いてきたので、問題ないことを伝え、まずはオレンジジュースを注文した。その後、料理を待っている間にまた店主が来て、テラスの席でなくてもいいかと聞いてくる。「あそこに座っているのは自分の妻だから（席を開けることもできる）」ということだ。別のテラスの席に座っている女性はどうやら正面の雑貨屋のスタッフのようで、17時半になろうとするところでさっさと店の鍵をかけ、席に戻り、新たなビールを注文した。料理を作る音に混ざって口笛も聞こえてくる。近所の人が飲みに来て、どんなに外が明るくても店を閉め、自分たちもおそらくゆっくりと食事を楽しむ。そうやって機嫌良く働き暮らす人々が、この店の、この通りの、この街の、心地いい空気を作っているのだろう。食事を終えてもまだ外は明るく、運河の周りには何かの終わりとは何かの始まりを楽しむ人たちの熱気に包まれていた。2019.6.29 Sat 10:50 Den Haag

183. 暮れる空に光る星

22時すぎ、地平線に沈む夕日を見た。正確には、太陽は地平線ではなく、「木々の連なるシルエットの向こう」に沈んで行った。国土が平らなオランダでは、普段太陽は建物の向こうに沈んでいく姿しか見えないが、昨日はオランダ式の10階（日本式の11階）にあるスパの一角からいつもとは違う夕暮れを味わうことができた。オランダに来て日が沈むところをゆっくり見たのは初めてかもしれない。

白に近い黄色の光が金色のような眩しい輝きに変わり、そこから橙に変わっていった。同時に、空の高い位置の青が藍に変わっていく。地上から上空に、七色よりももっとたくさんの色が重なる虹の幕のようなものが引かれ、その中で朱に近くなった太陽がつぶれはじめる。その少し上に、明るく瞬く星があった。キラキラと白い光を放ちながら、微かに上に昇っていつているようにも見える。「地球は動いているわけだし、星もあんな風に動くように見えるのかもしれない」そう思ってその星を見つめていたら、にわかに白い光が黒い点に、そして線に変わった。偶然こちらに真っ直ぐ向かってきていた飛行機が進路を変えたのだということをその瞬間に理解した。黒い線はあつという間に飛行機になり、北の空へと抜けていった。これまでそんな景色を見たことはなかった。いや、見ていたのかもしれない。見ていた星は飛行機だったかもしれないし、飛行機は星だったかもしれない。

でもそれに気づくほどにじっと、星や飛行機を見守り続けたことはなかった。人間も同じではないか。ものすごく狭い角度かもしれないけれど、キラキラと輝く角度がある。それを捉えることができているか、色々な角度から、ゆっくりと見守る見ることができているか。そんなことを考えながら、姿が見えなくなった太陽から尚も織り出される光の端を見ていた。2019.6.29 Sat 11:17 Den Haag

184. 「本物」になれなかった男

時刻は21時半に近づいているが窓の外にはまだ明るさと熱気が広がっている。今日は午前中にLeidenから戻り、いくつかの仕事をし、ひと段落したところでオーガニックスーパーに買い物に行った。いつも通りバナナとリンゴ、サツマイモ、そしてなくなりかけている小麦若葉のパウダーとカカオニブを購入した。スーパーの前にはドラッグストアに寄り、液体などを小分けする容器を購入した。明後日からまたロンドンへの滞在を予定しているので、ヘンプオイルなどを持って行こうと思ったためだ。今回のTilburgとLeidenでの滞在にも普段飲んでいる飲み物を作るためのパウダーなどは持って行き、バナナとリンゴと豆乳だけ現地で購入した。おかげでこれまでハーグ以外のところに滞在したときよりも幾分か良い食を摂れたように思う。例え仕事と呼んでいる対外的な活動がないとしても、よりクリアな感覚と思考を保つための取り組みは欠かせない。出かけるとその分、いつもとは違う環境で学びや気づきもあるが、とにかく食生活が変わりがちで、その結果、もったりとした空気の層に包まれたような、外界を感じづらい状態になってしまうので、旅先での食を改善していきたいというのがこのところの課題だった。ある意味暮らしの場所の変化も暮らしの一部であり、やはりゆっくりとした波のようなものをイメージして、大きなスパンの中でも一日一日の中でも自分を整えていきたい。明後日までに食べ切るであろう量の食材を買って、空気の眩しさに目を細めながらてくてくと帰ってきた。

その後、今回の旅の間に読んでいた本の残った部分を読み切った。読んでいたのは『ピカソになりきった男』という本だ。贋作作家としてピカソやダリ、シャガールの贋作を作り続けた人の手記を通して考えていたのは「本物とは何か」ということだった。この手記を書いたギィ・リブという男性は、ただ有名画家の絵を真似るのではなく、画家の感じたことや考えたこと、人生そのものを味わって絵を描いていた。そうやって既にある絵のレプリカのようなものだけではなく、その画家が描いたであろう（実際には描いていない）作

品を想定したものも描いたのだった。購入者の中には贋作と知りながらも絵の芸術性そのものを評価して購入したという人も少なからずいたということだ。そして贋作を本物たらしめていたのは、鑑定家や画家の家族がそれを本物であると認めた証明書だった。仮に、絵画の価値というのが描いた人の積み重ねた人生を通じて感じたことをその過程で身につけたテクニックや表現力で表現されたものそのものにあるとしたら、その結果、人の心が惹きつけられるのだとしたら、同じように心が惹きつけられた人がいた作品を、何を持って「偽物」だと言うことができるのだろうか。

そして湧いてくる疑問は「この人はこれだけの情熱と技術を持っていながら、なぜ自分自身の（誰かの贋作を作るというのではない）表現をしていくことができなかつたんだろうか」ということだ。そこにはアート業界の持つ構造も関係しているが、「模倣をし続けるのか、その枠を出るのか」というのは芸術に限らず人が向き合うことになるテーマのように思う。贋作作家（と呼ばれることになってしまった）ギィ・リブの場合は、贋作を描くことに大きな経済的なメリットがあったことに加えて、そうしている自分であればいわゆる上流階級と呼ばれる人々や彼が憧れを抱くような人々の近くにいることができたということも大きい。ピカソは「画家とは結局なんですか？」という質問にこう答えたそうだ。

－「それは、自分が好きな他人の絵を描きながら、コレクションを続けたいと願うコレクターのことだ。私はそうやって始め、するとそれが別物になっていく」「巨匠をうまく模倣することができないから、オリジナルなものを作ることになる」（ギィ・リブ著 『ピカソになりきった男』より）

ギィ・リブにも、自分の絵を描くように勇気づけてくれていた人がいた。しかし彼は別の画家になりきることにエネルギーを使い果たしてしまった。しかしそれはいつまでも続けられる訳はなく、彼は逮捕された。逮捕の経緯は彼の判断ミスが招いたものだが、心のどこかで本来自分が見ていることと違うことをしていることに耐えられなくなっており、その歪みが無意識に行動に現れたのではないかと想像する。実際彼が逮捕されたときに感じたのは、安堵感だったと言う。

何かを体得していく過程で、誰かの真似をするというのはある種必要なプロセスなのだろう。そもそもこれから学ぶことについてその価値を判断することもできないのだから、自

分が良いと思うか、そうでないかは別にしてとにかく全部を真似てみるというのが有効なときもある。しかしいつか、その先に自分なりの方向性を見出していくときというのが来るだろう。そんなときに、これまでの場所に留まり続けるかどうかは、今得ているものを手放せるかどうかにもかかっているのではないか。あまりにも多くのものを得過ぎて、それが自分の外部にあるにも関わらず自分自身と一体化し自分のアイデンティティとなり手放せなくなったギィ・リブの顛末とそのプロセスでの葛藤から、人間について思いを巡らせている。2019.6.29 Sat 22:18 Den Haag

185. 学びの構造とメタファーに彩られた物語

参加したオンライン勉強会を終えてベランダに続く扉を開けた。今日は風の涼しさを感じる。風が木を揺らし、カモメが遠くに向かって鳴いている。昨日、7月から開催される講座に関連する録音をいくつか聞いた。主催者である友人がもうかなりの数の録音をアップしていて、それだけで新しい知識はもちろんのこと、気づきや考察の機会をもらっていて、実際の講座の中ではどんな学びが生まれていくのだろうかとさらに期待と楽しみが大きくなっている。その録音の中に、「ラーニングログ」についての案内があった。自分にどんな気づきや学びがあり、さらにそれについて発達理論やインテグラル理論の観点からは（今回はインテグラル理論に関する講座ということもあり）どんなことが言えるのかということ記録していくことを勧めるものだった。日頃から本を読んだり、人との対話を通じて感じたこと・気づいたことについて手帳に書き留めたり、こうして日記に綴ったりしているが、「気づきについてどんなことが言えるか」というのはさらに自分自身を一つ外側から見てみることになり、ぜひ取り組んでみたいと思った。できれば、まずは気づきを言葉にした直後にそれについて考察し、さらに少し時間を置いて、1週間後、1ヶ月後、半年後、5年後、10年後などに自分の気づきについてさらに考察を繰り返してみたい。そうすると自分自身がどのような枠組みで物事を捉えていたか、それがどのように変化していったかというのが分かるだろう。もしくは考え方や捉え方というのは意外と変わらないということに気づくかもしれない。きっとそうだろう。時間がかかるということに気づくこと、そして、例え捉え方が変わったとしてもぶつかる課題のようなものはそのときそのとき尽きないということを体験することが重要で、自分自身の発達を後押しするためというよりも、そのときそのときの自分を知り、何を前提として人や世界と向き合っているか

というのに自覚的になることに活用したいと思っている。

どのような体裁がいいかまだ考えているところだが、できれば日記のように、どこかに置いていて、オープンにしていられるといいなと考えている。誰かのため、読んでもらうためではなく、あくまで自分自身のためだが、結果として他者が何かを考えたり自分自身と対話する機会になれば、それはそれで嬉しいと思っている。ラーニングログも何らか文章のような形にすることが大事だろう。箇条書きというのは手軽さ・分かりやすさはあるが、書いている人の思考の流れがわかりづらくなる。Aという事象からどのような思考を辿りBという考察に至ったのかというその流れを追えるということが、捉え方の変化を観測するのに有効であるとともに、そもそも思考というのはそうやって鍛えられていくのではないかと思う。本を読んで書いてあることに「そうだよね」と思うのと、自分でその間を思考するのは全く違う行為だと思う。自分が考えるとどうなるか、自分はどのように考えていて、相手はどのように考のえているのか、そこまで考えて書かれていることを読み解くことができたなら読書もまた違った体験になるだろう。

ここのところ日本に帰るたびに10冊以上の本を持ち帰りそれに加えてKindleでも定期的に本を購入しているが、一旦それを打ち止めにして、もしくは英語の書籍を読むことに限定し、物事と向き合う自分の思考を繰り返し客観的に捉えていきたいと思い始めている。7月から始まる講座も、それを咀嚼し自分なりに再構造化するにはかなりの時間がかかるだろう。このままでは消化不良を起こしかねない。外から取り入れたものを醸造させて行くのがこれからの1年ないし2年くらいの時間なのではと思う。今既に手元にあるまだその世界観を捉えきれていない本たち、クライアントや友人、自分のコーチたちとの対話、日々の暮らしの中に十分過ぎるほどに学びの機会はあるだろう。結局のところその対象が何なのかではなく、どんな自分がそれにどう向き合っているのかなのだと思う。

今日参加したクリーン・ランゲージについての学びもラーニングログという形でまとめていきたいが、今印象に残っているのは、「人はそれぞれの世界観の中で言葉を使っていて、その言葉が変わっていくと、体験すること（世界観）自体が変わっていく」ということだ。人は1分間に平均して6個のメタファー（ここで言うメタファーとは「ある事柄を別の事柄に置き換えて体験すること」を指す）を使っているそうだが、一見、一般名詞や固

有名詞に見える言葉でさえ、その人の意識のフィルターを通して使われた言葉であって、話していること全てがメタファーなのではないかと思うくらいだ。そのメタファーをこちらのフィルターを通さずそのままにもっと表現してもらうことで、メタファーが彩り鮮やかになり、体験が活性化されていくというのが興味深い。

これは私が最近「物語」と呼んでいるものにも近いのではないかと思う。人は自分が既知だと思っている物語の外側に追いやられた物語について話し尽くすと、自分の物語の構造自体に気づき、構造が分かるとそれを壊すことや、さらにその外側に出ることができるようになるように思う。これについてはまた整理をして書いていきたいが、現在企業の中で行われている1on1と呼ばれる面談やコーチングが、結局、生み出すものの質的变化に結びついていないことも多いのは、この、「自分たちが生きている物語の構造に気づく」ことに至れない、表面的な情報のやりとりに終始してしまっているからではないかと思う。イノベーションというのは、一人一人や組織が持つ物語の構造（バイアスとも呼ばれる）を壊すことによって起こるのではないかと、先日からの小旅行の中で考えを巡らせている。今日は、ラーニングログのフォーマットのたたきを作り、来週末から始まる講座に向けて録音を通じて学びと自分なりの考察をすることに取り組みたい。2019.6.30 Sun 11:59 Den Haag

186. 「いつかやろう」をいつやるか

散歩から帰ってきて寝室からベランダへと続く扉を開けると、グワグワ、ピィピィと中庭に響く鳥の音が、ひんやりとした空気とともに部屋の中に流れ込んできた。相変わらずこの時間はまだまだ夕暮れという感じがしない。いや、この時間に限らず夕暮れという感じはしなくて、22時半を過ぎた頃に、にわかに夜が空にやってくる。

運河とトラムの通る線路の間にある背の高い並木の植えられた道を海の方に向かって歩いていると、一人の男性にすれ違った。微かに微笑んだ目は透き通った青だ。あの目を通して、世界はどんな風に見えるのだろうと思った。鏡を見ないと、自分の目の色は見えない。鏡を見ても、もしかしたら自分の目の色というのは正確にはわからないかもしれない。当たり前のように見えている世界が、独自の色のついた目を通して見ているものだということには自分と他者の目の色の違いを見たときにはじめて気づくのかもしれない。

並木道を進み、一番目の橋をぐるりと回って、運河の逆側の岸辺の道をまた歩く。運河に並ぶボートハウスには船がつけられ、読書をする人たちがいる。そういえばこの間この光景を見たのも日曜日だった。これがオランダの日曜日なのか、それともこれがオランダなのか。いずれにしろゆったりとそこにある時間を楽しむ人たちがいる。

明日はスキポール空港を9時前に出発する飛行機に乗るので家を出るのは6時半前になりそう。イギリスとは時差が1時間あるので、こちらからロンドンに行くと、出発したのとはほぼ同じ時刻に到着する。なんだかちょっとだけ得をした気になる。しかし、通貨はポンドになり、例えばオランダで10ユーロくらいのランチがイギリスでは19ポンドくらいするので、ポンドとユーロのレートを考えると何だかとても物価が高い場所に来たという気にもなる。そうは言ってもこのところポンドは少し下がっているようだが。

未だにユーロやポンドのレートの計算を円を基準にしているけれど、そのうちこれがユーロを基準にするようになるのだろうか。そういえばこの間見たYouTubeでイギリスの人が「イギリスとヨーロッパ」という言い方をしていた。どうやらイギリスの人にとって、すでに（ずっと？）イギリスはEUでもヨーロッパでもないようだ。日本にいて、日本はアジアかと聞かれると「そうではあるけれどひとくちにアジアと言ってもかなり広いし国によって全然違うしなあ」と思うだろう。イギリスの人もそれと同じような感覚なのか。

相変わらずグワグワと鳴く鳥の声の向こうから音楽が聞こえてくる。誰かが演奏しているのではなく、再生されたような音だが、向かいの家を飛び越えてやってくるにもかかわらずどこか籠った音をしている。果てしなく広がるように見える空の内側に見えない傘があってそこに反射をしてくるようだ。明日の支度はほぼ終わったので今日はこのあと、ゆっくり本を読んで過ごすことになるだろう。ロンドンではハーグより少し涼しいと聞いたが、天気予報で見ると気温は同じくらいだ。滞在先の近くに大きな公園があるようなので運動靴を持っていくことにしたが、これまでの経験上、運動靴は持って行っても結局使わずに持って帰ってくることが多い。東京で会社員をしていたときは「出張先にジョギングシューズを持って行って朝は気持ち良くジョギングして、カフェで朝食を食べるみたいなことをしたいなあ」と夢見ていたけれど、それができる環境になっても結局なかなかそんなこと

はしないものだ。これまで「こうしたいなあ」と思ってきたことのほとんどは今きつとできるようになっていだろう。「いつかやろう」は、いつまで経ってもやらないし、やろうと思えばいつでもできるのだとも思う。

我が家は親がとにかくよく寝る人たちだった。今思えば、平日は仕事が忙しく、土日はできるだけ体を休めたかったのだと思う。週末は決まって「昼寝の時間」というのがあり、私たち兄妹も眠くもないのに昼寝の時間に付き合っていた。三つ子の魂百までと言うか、そのゴロゴロが板についたのか、大人になった私も気づけばよく寝ていた。結婚していた頃は週末もシャキっとしている夫に「草ちゃんをよく寝るねえ」とよく言われていた。今も昼下がりに本を読んでいたら寝ていたということはよくあるが、歳をとったせいか、昼間寝ると夜なかなか寝付けなくなってしまった。夜寝付けないと昼間眠くなる。この眠りの習慣は改善のしようがありそうだが、三つ子の魂は結構強烈かもしれない。しかし夕方寝て起きたとしてもその後明るい時間が長いヨーロッパの夏は、なんだか一日が長くなったような気がして「うたた寝くらいでもいいか」という気にもなる。ドイツにいたときに一時期滞在していた家のドイツ人のお母さんは、夏は2,3週間ほどスペインに出かけていた。夏のスペインでは人々はもっともっとゆったりとした時間を過ごしているのだろうか。来年あたり、夏に数週間、ヨーロッパ式の休みをとってみたい。これまでの私の性分だとのんびりした日というのは2,3日すると飽きてしまっていたけれど、今はまた違った世界が見えてくるのだろうか。まずは今年も日本のお盆などの時期に合わせて、日記を書く以外にデジタル機器を一切使わない期間を作ってみてもいいかもしれない。だいたいこのことは、今すでにできるのだ。2019.6.30 Sun 20:21 Den Haag

187. 薄暗い列車に乗り込んで

ハーグの中央駅に着くと、スキポール空港を通る電車は既にホームに到着していたが、車両の中は薄暗かった。しかし扉は開いている。席に座っている人の姿も見える。扉の一つから中に入ると、ちょうど2階部分から降りてきた車掌さんのような人がオランダ語で朝の挨拶をしてきた。「そろそろ挨拶くらいオランダ語でできるようにならないとな」と思いながら2階に上がると電気のついていない車両の中に1人だけ女性が座っていて「Hi」と挨拶をしてきた。ハーグはオランダの中で3番目に大きい都市だが、中心部を離れると道ゆく人が挨拶を交わす。そういえば先日Tilburgに行ったときは電車で向かいに座った人が

話し出し、もう一人後から来た人もその話に加わる様子を見た。3人はもともと知り合いではないようだった。そこに居合わせた人同士が話しを始めるというのはオランダでは珍しくない。オランダ語か、英語か、それともまた別の言葉か、とにかく話していることは分からないので、どうやって会話が始まるのかいまだに不思議で仕方ない。

駅の改札に入る前の広めの通路の部分では、ピアノを弾いている人がいた。オランダの駅、特に中央駅と呼ばれるところにはピアノが置いてあることが多い。そしてそのピアノを弾いている人を見かけることも多い。なぜだか分からないが、今思い出してみると、ハーグの駅でピアノを弾いている人は圧倒的に男性が多い。学生のような人から年配と呼ばれる年齢の少し手前くらいの人まで、まるで駅であることを忘れていたかのように、思い思いに演奏をしている。その演奏はいわゆる「上手」だとは限らないのだが、むしろ人の目を気にせず弾きたいものを弾いているという姿が清々しく見える。以前オランダ人の友人にオランダの駅にピアノがあるのはなぜかと聞いたが、「その場所の雰囲気が良くなるように、昔からピアノがある」というぎっくりとした回答だった。オランダの人には駅にピアノがあることが当たり前すぎて、「なぜあるのか」ということをわざわざ考える機会自体がないのかもしれない。クリスマスの時期にはピアノの演奏に合わせて歌う人々がいることもある。誰かのためではなく、本人たちが楽しくてやっていて、それが結果的に周囲の人を楽しませるといえるのはオランダの人の在り方を象徴しているようにも思う。

起きた時刻がものすごく早かったわけではないが、まだ身体が起ききっておらず血圧が下がっていつているように感じるのは、目覚ましを使って目覚めたことと、いつも朝に飲むドリンクに加えてバナナとカカオニブを混ぜたものに豆乳をかけたものをかきこんできたからだろうか。胃から背中にかけてエネルギーが吸い込まれていくことを感じる。スキポール空港に着くまでの間、以前書いた日記の編集をしようと思っていたがどうも頭が働きそうにない。久しぶりに読み直そうと持ってきたアドラー心理学についての本を眺めて残りの時間を過ごそうと思う。と言っても、もうライデンに着くのでその次のスキポールまでは19分ほどだ。地元の福岡は空港が福岡市の中心部から地下鉄で約20分ほどのところにあり随分便利だと思っていたけれど、ハーグも（ライデンからだより更に）空港に行くにはなかなか便利だ。トラムからの乗り継ぎが良ければ1時間かからずに空港に着く。電車の座席はライデンから乗ってきた人でほぼ埋まった。右斜め前方からの太陽の光を受けなが

ら、電車は再び走り出した。2019.7.1 Mon 7:18 Den Haag – Leiden

188. マシンガンとリンゴ

スキポール空港の入り口のホームには警官が3人いた。ガッチリとした体に防弾チョッキをつけ、マシンガンを持つ姿を見て、どんなに普段治安の悪さを感じることもなくとも、ここが日本とは根本的に大きく違う場所なのだとすることを思い出す。一昨年ドイツで暮らし始めて最初にドイツの警官を見たときは胸がとてもざわざわした。やましいことは何もしていないのになぜこんなに心がざわつくのだろうと思って考えると、警官が体からはみ出るくらい大きなマシンガンを抱えているからだということに気づいた。日本の警官も拳銃を持っているのだろうけれど、それを意識したことはなかったし、ましてや本物のマシンガンを見たのも恐らく生まれて初めてだったのだろう。その後、やはり何度見てもマシンガンを持つ警官の姿は私にとっては異様であり続けている。クリスマスマーケットのような場所だと余計に楽しい雰囲気とのコントラストがハッキリとする。その物々しい姿を見る度に、様々な民族や宗教の人が暮らす場所であること、そして民族や宗教・国家の間にある対立のようなものが今もなお世界には存在しているということを実感する。

前回ドイツに向かうときに通ったセキュリティチェックではスーツケースからPCなどを出すように言われたが、今回はスーツケースを開こうとするとそのままいいと言われた。しかし、PCと液体を入れているせいか、案の定、チェックの機械を通った後スーツケースは検査員のいる再チェックをする側に流れていった。セキュリティチェックの機械の横には画面を見つめる係員がいる。以前、普段は見えないその画面が見えたことがあったが、そこにはちょうど、リンゴの形が表示されていた。Macの本体のリンゴマークのところだけ金属が切れていて、その形が表示されていたのだった。いつ頃からそういう仕様になっているのかは分からないが、検査員が初めてそれを見たときには驚いたことだろう。何だか分からないがリンゴマークのものがあるのだ。まだMacのノートパソコンがメジャーになっていないときは、「最近、あのリンゴのパソコン増えてきたよね」なんて会話がセキュリティチェックの検査員の間で交わされていたのだろうか。忍び寄る、もしくは急速に訪れる世の中の変化を最初に感じる場所は空港のセキュリティチェックなのかもしれない。

ガラガラだったセキュリティチェックに比べるとパスポートコントロールは割と人が並んでいて、ゲートを抜けたときにはもう搭乗時刻が近づいていた。2019.7.1 Mon 11:43

London

189. 入国を拒む国の自動化ゲート

飛行機からタラップに出ると、スキポールに吹いていた風よりもずっと涼しい風が走ってきた。今回持ってきた服は寒かったかもしれない、しかし、都心に近づけばもっと気温が上がるかもしれない。そんなことを考えながらターミナルの中を歩く。到着したルートン空港を使うのが初めてかどうか記憶が曖昧だが、少なくともロンドンの空港でパスポートコントロールが自動化ゲートになっており、EU圏の人以外も通れるというのは初めてだったので驚いた。（どうやら最近イギリス内の空港はどこもパスポートコントロールが自動化されたゲートになることが進んでいるらしい）ロンドンと言えばパスポートコントロールが厳しいという印象だ。

初めてロンドンに来たとき、「ヒースローは人も多くてパスポートコントロールが厳しい」と聞いていたためLCCの発着する別の空港を選んだのだが、それでも入国の壁は高かった。その当時は持っていたのがドイツで発行された紙製の語学学生のビザだったということもあるかもしれないが、何のために来たのか、仕事は何をしているのか、日本の家族に収入はあるのかと、事前にネットで調べていた通りあれこれと立ち入ったことを聞かれ、日本の銀行のネットバンクの画面で残高まで見せることになった。観光で1日だけ滞在するというのが逆に怪しく思われたのかもしれない。そして観光で1日だけ滞在するのに半年分の滞在許可のスタンプを押された。そんな風に一度入国すると長期間滞在することができてしまうので、不法就労を防ぐという意味もあるのだろう。「女性が一人で来ると滞在許可欲しさに現地の人と偽装結婚をされると思われるので特に入国審査が厳しい」と書かれているサイトもあった。フリーランスの独身女性に対する風当たりが強いというのは日本とイギリスに共通している。

入国は厳しかった割に出国時はパスポートではなく航空券にスタンプが押された。出国した際にパスポートのスタンプを押されていないと次に入国するときにトラブルになること

があると聞いていたので次にイギリスに行くときに念の為スタンプの押されたチケットを持っていったところ、案の定、パスポートコントロールで「前はいつ出国したのか」と尋ねられた。出国した印であるチケットを見せると今度は「あなたは1日の滞在だったのになぜ6ヶ月の滞在許可のスタンプを押されたのか分からない」ときた。とにかく私の中でイギリスは「入国を拒む国」である。そんな国が自動化ゲートで通そうとしてくれたこと、そして自動化ゲートを通れるEU以外の12の国に日本が入っていることに感謝をしつつゲートでパスポートの読み込みをし、顔写真が撮られるのを待ったがなかなかゲートが開かない。しばらく待ったがやはり開かない。そして有人ゲートを通るようにというアラートが出た。どうやらパスポートの写真と今撮られた写真の照合ができなかったらしい。確かに滑走路を抜ける風に煽られた髪はボサボサでパスポートの写真とは随分違っているかもしれないが、パスポートを更新した約2年前から歳も取ったということだろうか。そんなことを考えながら、有人ゲートで写真をちらりと見られ、機械にかざれたパスポートを受け取り、荷物の回る回転台のあるホールを抜けて、空港のロビーへと進んだ。2019.7.1
Mon 12:16 London

190. 意味を持たない音に揺られて

夕食の洗い物を終えてひとやすみしていたら、窓の外から鳥の声が聞こえてきた。イギリスもこの時間はまだまだ明るい。今日は朝から夕方までセッションがあり、散歩がてら外に出たのは17時を過ぎてからだった。日照時間が長いと、一日屋内で過ごしても「まだまだ時間はあるぞ」という感じがする。

暮らしと仕事と旅の境目はもう曖昧で、それぞれがそれぞれのために存在し、影響を与え合い、一体でもある。欧州ではアパートメントタイプのホテルも多く、リビングに寝室、キッチンがあり料理をすることもできるので、まさに暮らすように旅をし、その中にいつもと同じように仕事がある。そして普段オランダの家にも、いまだに旅をしているような感覚がある。

思い返せば2年前欧州に渡って以来、ずっと旅をしているようだ。実際に、ドイツに来てはじめての5ヶ月間くらいは1週間から3週間ごとに住まいを変えて過ごしていた。ドイツで

は小さな子どものいる家庭が空いている部屋を大学生に貸す代わりに子守をしてもらうという仕組みのようなものがあり、airbnbのようなシェアリングプラットフォームができる以前からシェアをするというのは一般的だったようだ。そのおかげで私も大きな家の空き部屋を大学生に貸し出すおばあちゃんの家の一室などに住むことができた。ドイツの家はオランダよりも広いところが多く、バスルームやキッチンが複数備え付けられている場合もあり、シェアでも特に不便はなかった。中には猫がいる家もあって、そこでは部屋に入ってくる猫と遊ぶのが楽しみにになっていた。シェアをするけれど生活には全く干渉し合わず、同じ家の住人と一緒に食事をしたり、庭先でワインなどを飲んで楽しい時間を過ごしたりしていたとしても、それぞれが自分のタイミングで「じゃあおやすみなさい」と部屋に帰っていく。人に合わせてだらだらと長居しないというのはとても大人で楽な関係性の持ち方だと感じた。

オランダの人のことはまだよく分からないが、知る限りドイツ人は本当に建前のようなことを言わない。先日ドイツ人の友人の結婚式に行き、新婚旅行の話になったときも、タイにバックパックの旅行に行くという新郎新婦に「ぜひまたオランダにも遊びに来て」と行ったら、「今年はもう時間がないからオランダには行けない」と言われた。雰囲気流されて話を合わせるということのない彼らは、考えをハッキリ伝えてくれるので、愛想良くはないがコミュニケーション上のストレスは少ないように思う。翻って日本はというと、言葉と心が一致していないということが往々にしてある。察することや汲み取ること、慮ることが美德ともされるが、心をそのままに表現しない習慣から本人さえ自分の心が分からなくなってしまうのではないかと。心の中でどんなに「紅茶が飲みたい」と思っているとしても、「コーヒーをください」と言えばコーヒーが出てくる。それだけのことがなぜかとても複雑になっているように思う。

そんなことを考えるせいか、言葉が分からない国での暮らしというのは本当に楽だ。昨日もルートン空港からロンドン市内に向かうバスの中、後ろの席に座った人たちがずっと話をしていて、話し声は頭の上をただただ通り過ぎていた。言葉というのはそれに意味を付与されて言葉になり、意味が付与されなければただの音でしかないということを実感する。人の話に聞き耳を立てているつもりはないが、日本にいると嫌が応にもあらゆる場で、特に人が話をする場では意味の嵐の中にさらされる。そして、職業病なのか、人が話しているときに、ある特定の同じ単語を使っているにもかかわらずそこに付与されている意味が微妙に

違っていることなどに気づいてしまい、「こうやって人の心はすれ違い続けるのか」と、余計なことを考えてしまう。仕事では言葉の向こう側にある、その人の生きる壮大な物語に耳を澄ませているので（そのこと自体はとても好きなことだけど、実際にそれは結構なエネルギーを使うので）日常生活の中では、意味をなさない鳥の声を聞いているくらいがちょうどいい。今のところ英語も、聞こえてくることや看板の文字などがそのまま意味としてダイレクトに脳に入ってくることはなく何らかの処理をされて初めて意味を持つものとなるので街中を歩いていてもとても楽でいられる。人とコミュニケーションを交わすために、もしくは日本語では得られない情報を得るために、英語をはじめとした母国語以外の言葉がもう少しできるようになればと思う反面、いつまでも言葉の分からないストレンジャーでいたいとも思う。電車で近くの座席に座った人が話している内容が無意識に頭に入ってくるようになったとき、私はきっとその場所に居心地の悪さのようなものを感じるだろう。

昨日、滞在先に荷物を置き散歩に出ると、同じ建物から出てきた男性が話しかけてきた。ケンブリッジから来たと言う。「何か特別な理由でここに滞在しているのか」と聞かれ、丁寧というか婉曲的な表現はイギリスらしいのかなと思いながらそういうわけではないと答えると、彼は自分はウィンブルドンを観に来たのだと言った。それを聞いて初めて現在テニスのウィンブルドン選手権が開催されており滞在先がウィンブルドンからほど近い（と言ってもさほど近いわけではないが）場所だということを知った。「遠い異国の地」だと思っていた場所に自分がふらりと来ているのは不思議な感じだ。それでもまだまだ「異国」や「未知の場所」はたくさんある。一人一人の生きる物語に出会うように、まだ知らぬ場所の物語に出会い続けていきたいと強く思う。2019.7.2 Tue 19:48 London

191. 海外の海外から

ココナッツオイルを口に含んでヨガを終え、水を飲み、窓の外の鳥の声に耳を傾ける。部屋の片付けをして、カカオパウダーとヘンプパウダー、はちみつにアマニ油を混ぜ水で溶いたドリンクを飲む。いつもとほぼ変わらない朝だが、今はオランダの自宅から約350km離れた場所にいる。ちょうど東京から名古屋くらいの距離だろうか。飛行機で1時間ほどの場所が、「海の外の島」であり、言語も通貨も文化も違う場所だというのは、例えば釜山から福岡に来た人が感じる感覚に近いのだろうか。日本にいると他国を当然のように

「外国」「海外」という呼び方をするが、それは島国ならではの感覚だということも欧州に来て気づいたことだ。陸続きで繋がっている国々にとって、他国が必ずしも海の外にあるわけではなく、領土内に隣国・他国の飛び地がある場合もある。英語の「abroad」は「海外」と訳されるが、厳密には二つの言葉は全く同じもの・同じ感覚を表しているのではないのだと思う。とにかく私は今、日本から言う「海外」に住んでいて、さらにそこから「海外」に来ている。

先ほどからガアガア（カアカア）という鳴き声が聞こえるが、これはカラスの声だろうか。そういえばオランダではこの声はあまり聞かない気がする。文化や慣習・考え方など普段自分が囲まれているものが地域や国の特性だったということは、やはり違う環境に身を置いたときに気づくのだろう。そういえばルートン空港からバスに乗り、パディントンというロンドン西部の大きな駅に降り立ったとき、カモメの声が聞こえた。見上げると、空高く一羽のカモメが飛んでいた。これまで何度かロンドンに来たが、カモメがいることに気づかずに過ごしてきた。カモメというのは海の近くにいるとばかり思っていたが、どうやらそうでもないらしい。言葉もそうだが、「それが何を示すか」を知っていないと、その存在自体を認知するのは難しい。知らない単語はするすると聞き流されるし、鳥の声も、ただの音として耳を抜けていく。人間は、相手が話している言葉の何割くらいを意味と結びつけた言葉として認知しているのだろうか。私が様々なジャンルの本を読むのは単に読書が好きだということもあるけれど、知らない言葉自体に出会い続けたいというものもあるのだと思う。知らない言葉の意味を知り、その言葉の生きる生態系全体に思いを馳せる。それは人の物語に出会うのと同じ行為なのだと思う。逆に、自分が表現したいことを表現できる言葉はないかと調べることも好きだ。「ああ、この感覚はこのような言葉が当てられるのか」ということを理解し、何度も使ってみる。そうしていくうちに知識として知った言葉が、自分の体験と結びついた生きた言葉になっていく。人の話を聞いていて「借り物の言葉」だと感じるのは、その言葉がその人に馴染んでいる感じがしないときだろう。身体ではなく頭から出てきた言葉はどんなにスマートで聞こえが良くても人の心を揺さぶりはしないのだと思う。

街中にランチをしにいくまで少し時間がある。今日発行するニュースレターに今この瞬間の感覚を載せ、これまでの日記の編集を進めようと思う。2019.7.3 Wed 9:08 London

192. 二階建てバスからの景色を見ながらロンドンの渋滞を解く

ロンドンの中心部からバスと電車を乗り継ぎ、1時間半かけて滞在先に帰ってきた。地下鉄を使えば1時間で帰ることができたが、狭いロンドンの地下鉄に乗りトンネルの中を走り続けるよりも、街を眺めていたかった。バスに乗ると、エリアごとの街の雰囲気の変化やそこにいる人々の様子を見ることができる。ロンドンを走る二階建てバスからの景色は、まさに「視座が高くなる」感じだ。なかなか進まない中心部の道路から外を眺めながら、「問題を解く」ということについて考えていた。

例えば交差点があることが渋滞を引き起こしているとする。交差点というのは、その名の通り、交差する交通を捌くための場所である。（交通の事例を引き合いに出すのは、大学で交通を専門とする研究室に所属し、交通に関する研究をしていた名残なのだろうかと思ふと思った）この場合、変更できるものとしては、車線の数や信号の変わる秒数・タイミングなどがある。しかし、交通量が増えていくとどの変数を変えても渋滞が発生してしまうようになる。なぜなら交差点の面積を規定すると、一定の時間で交差点を通れる車の総量が決まるからだ。（車線を増やせば多くの車を通すことができるが、現実的に交差点にあてられる面積には制限があると考え）それに対して、「交差」という概念をやめたのがラウンドアバウトやロータリー、もしくは環状交差点と呼ばれる円形の交差点である。（交差していないのでそもそも交差点と呼ぶべきなのかさえ怪しい。「交差点」という呼び名が人の発想を狭めてしまっているのではないかと思うので、いっそのこと「traffic control zone」など名前を変えてしまってもいいのではないだろうかとも思う）円形だと、進入可能速度が直線の交差点に比べて制限されるとともに（高速での進入ができるようにするにはかなりの面積が必要ではある）ラウンドアバウトを通過できる交通量にも限りがあるので必ずしも渋滞解消に役立つとは言えないが、「交差」という前提を覆してはいる。

別の方法として考えられるのは、立体交差だ。これも、上から見ると交差しているが、そもそも直接交わらせないという考え方のシフトをしている。左折や右折をしようとする交通のことを脇におくことになるが、二次元で解けなかった問題も、三次元にすると解くことができる。これは、「平行ではないけれど交差していない線を引いてください」という

問題を解くことと同じだ。 $y=ax+b$ と、 $y'=cx+d$ は $a \neq c$ のとき必ず交わる。と、数式を持ち出してみたけれど、さすがに三次元での直線の方程式は思い出せないし、今調べても書き表すのがだいぶ困難だ。「平面状で交わっているように見える直線も、立体に表現すると交わらないということもあり得る」ということを言いたい。（しかし、その場合、別の角度から見ると平行に見えるので、厳密には平行でないとは言えないけれど、「ある地点から見て平行ではないけれど交差していない線」は三次元上には表現することができる）ロンドンの場合はバスを二階建てにすることによって、車線や車の数を増やすことなく輸送人数を増やすということを行なっている。これは考え方としては交差点が平面であることは変わらないが、人を運ぶ面を二層作ることにより、同じ面積の交差点でも二倍の人数を通すことができるようにしている。

さらに、そもそもなぜ都心部の渋滞が起こるのかということを見ると、都心部にオフィスビルや商業施設が集中し、そこへの通勤と帰宅のための交通および物流が発生するという理由が浮かんでくる。それならいっそ、オフィスを都心ではない場所に置くということもできるし、さらにオフィスというものを作らず、リモートワークをするという方法も出てくる。

「交差点で起こる渋滞」という課題に対して、「なぜ交差点で渋滞が起こるのか」を考えることもできるし、「なぜ渋滞が起こるだけの交通量が発生するのか」を考えることもできる。もしくは「渋滞の結果、何が起こることが問題なのか」と考えることもできる。人が時間を気にしないくらい十分に時間があり、排気ガスを出さず再生可能エネルギーのみを使って車を動かすとすると、そもそも渋滞が起こること自体は問題でなくなるかもしれない。少なくとも交差点での渋滞という課題をそのまま、平面もしくは限られたエリアの交通の問題として捉えていたのでは、その問題を解くことはできないだろう。

視座が上がれば、平面だったものが立体に見えてくる。そうすると解けなかった問題を解くことができるかもしれない。しかし、必ずしもそれが優れているとか良いかというところでもないように思う。バスに乗ると、道に咲いている花に気づくことはできない。地下鉄も交通問題を三次元的に解消しているが、地下鉄に乗ると街の起伏やエリアごとの変化は見るができなくなってしまう。飛行機に乗ると交通渋滞に巻き込まれずに速く目的地に着くことができるが、道に咲く花どころか、地上の様子はほぼ見えなくなってしまう

う。（その代わりに空からしか見ることのできない地形などを見ることはできる）時には鳥の目で、時には蟻の目で、何よりも人間らしく、できれば歩くはやさで世界と出会っていったらというのが、散々考えた渋滞解消問題のからの思考の散歩の結論となった。

2019.7.3 Tue 21:26 London

193. レンブラントとキャプテンクックに向き合って

ロンドンの中心部からバスに乗る前に訪れたのは大英博物館だった。振り返ってみると昨年3月頃に初めてロンドンに来て以来4度目か5度目のイギリス訪問だが、旅先で計画的に観光らしい観光をするほうではないので、「次にいつ来るか分からないし、せっかく歩いて行ける距離に大英博物館があるようなので行ってみよう」と思ってスマートフォンの地図と実際の道を照らし合わせ歩き始めた。「ロンドンとパリはどちらも中心部に大きな川が流れているので記憶が入り混ざっているなあ」と思いながら進んでいると、見覚えのある通りに出た。なんと、1度目の滞在の、しかもおそらく1日目に大英博物館に来ていたのだ。「せっかくロンドンに来たのだし、大英博物館に行っておこう」という思考回路は、どうやら1年以上前から全く変わっていないようだ。（そして、行ったことがあるということすらすっかり忘れるということも毎度のことながら変わらない）思考回路と行動の大枠は変わらないが、今日の私はどんなところに興味が向くだろうと思いながら、石造りの建物に足を踏み入れた。

書店で買った本などがあり荷物が多かったことと、一度来ていたということもあり、全体を見て回るのではなく気が向く場所に足を運んでみようとして、なんとなく近くの階段を登ると、レンブラントに関する展示の案内があった。アムステルダムにはレンブラントがアトリエにもしていた住まいが「レンブラントの家」という美術館になっている場所がある。そこを訪れたときレンブラントが画家として優れていただけでなく商才があったということに驚いたということ思い出しながら、展示の入り口に掲げてある案内文を読むと、「レンブラントはヨーロッパで最も有名かつ革新的な画家の一人である」という書き出しに目が留まった。当然のことながら、オランダではレンブラントは「オランダ（人）の画家」という説明になる。どちらも事実だが、その表現の仕方には若干の違いを感じるのが興味深い。

飾ってある銅版画を見ようとする、その中身よりも、「マット」と呼ばれる、額縁との間に挟まれる台紙のようなものに目がいった。ガラスの向こうに展示されている絵は額縁には入っていないが、マットがつけられており、なぜそうしているのかと思ってよく見たところ、マットの部分には、レンブラントの名前と、日付、いくつかの番号が印字されていることに気づく。銅版画なので、おそらく、刷られた日付と、その通し番号のようなものだろう。それを見て、先日読み終わった『ピカソになりきった男』に書いてあったことを思い出した。『ピカソになりきった男』は贋作画家の自伝だ。そこで知ったのは、贋作というのは決して一人で作れるわけではないということだった。その絵を本物だと思い込む人があることはもちろんのこと、その絵を本物だと認める人が必要なのである。それは画家の家族であったり、鑑定士であったりするのだが、本物だと認めてもらうために、紙や額縁やマットも絵が描かれた時代に則したものである必要がある。それらを調達・供給する人、そして本物だと認める人、さらには流通させる人がいてはじめて、本物という名の贋作が出来上がるのである。レンブラントの銅版画も、マットの部分に印字された数字があつてはじめて本物と認められたはずだ。むしろ、これが本物と言えるのは、このマットがあつてこそかもしれない。だから、刷られた紙だけでなくマットに入れられた状態で展示されているのだろう。そんなことを考えながらみると、レンブラントの家で見たものとはまた違った味わいというか面白さを感じる。マットの中には、日付以外に、何かの名前のようなスタンプが押しあつたものも多くあつた。スタンプにはいくつかの種類がある。おそらく、これは銅版画を刷った場所か、もしくはそれこそ認定をしたか販売元になつた場所のスタンプだろうと想像した。まさに本で読んだ話と実際に出会つたかのような時間だつた。

次に足を進めたのはキャプテンクックに関する展示だ。キャプテンクックは何となく名前を聞いたことがあるというくらいだつたが（イギリスに生まれ、太平洋を航海しハワイ諸島を発見したということは今調べて知つた）、コーナーの最初にある説明文の出だしにやはり目が留まつた。「Understandings of history are rarely agreed and always shifting.」（歴史に対する理解はめつたに合意されず、常に変化している）という文章を読んで、これは移動中に読んでいたアドラー心理学の本に書いてあつた「認知バイアスは、現在の状況に対してだけではなく、過去の記憶に対しても作用する」というのと同じことを言っているのではないかと驚いた。なぜ驚いたかという、歴史に対する理解の話は、一人の人だけでなく複数の人の間、大きくは国家間の認識に関する話のほずで、それが個人の認知の話と

一致しているということを想像していなかったからだ。今私は、個人の物語や意味づけを更新することに携わっていて、それは組織やコミュニティにも適用できるという仮説を持ちつつあったが、それがもっと大きな範囲にも当てはまるということか。確かに国家も個の集まりで、時代背景などによって特定の考え方を持つ有機体のように捉えることもできる。仮にその規模の物語（認知）が書き換わるとしたら、それはどのようなメカニズムで起こるのだろうか、ということを考えていた。また、歴史とは常に「発見する側」と「発見される側」がいて、どちらの視点に立つかによって全く違う描かれ方をするのだということも考えていた。これはまた別の機会にも掘り下げてみたいテーマだ。思考回路と行動パターンはほぼ変わらないが、その中で目に留まるものは常に変化していくのだということを実感する。2019.7.3 Tue 21:55 London

194. 異国での小さな望みと前提を書き換えるということ

飛行機がスキポール空港の上空に差し掛かったところで、オランダのSIMを入れたスマートフォンが震えた。オーナーのヤンさんから、「あなたの部屋で鳴っているアラームのバッテリーを交換する必要があるそうなので部屋に入っていいか」というメッセージが入っていた。何のアラームのことか分からないが、部屋に入って問題ないということと、ここ数日家を離れていたのでアラームにも気づいていなかったという返事を返した。見るとヤンさんがメッセージを送ったのは今朝6時前だったようだ。案の定、「もう既に寝室のドアの上のアラームのバッテリーを交換した。とてもうるさかったので聞かなかったならラッキーだ」という返事が返ってきた。6時前であれば目は家にも起きていたかもしれないが、いずれにしろ突然大きな音が鳴るというのは確実に心臓に悪い。部屋にいなかったのは本当にラッキーだっただろう。

飛行機は既にターミナルビルのそばに止まり、通路側の人々は座席から立ち上がって荷物棚から荷物を降ろして飛行機のドアが開くのを待っている。なんとなくざわざわとした空気が広がりだしたときにアナウンスが入った。どうやら何かのトラブルでどこかのドアが開かないようだ。「誰かが内側からドアを閉めて開かない」ということだけ聞き取れたが、どこのドアの話なのか分からない。アナウンスを聞いた人々は「あーあー」という顔をしている。こういうとき、アナウンスの内容が分からないことそのものよりも、そこに居合わせた人と同じ気持ちになって顔を見合わせられないことが残念だ。異国人のまま

いたいけれど、ジョークを聞いて周りの人と一緒に笑ってみたいとも思う。

しばらくして出入り口のドアが開いた。タラップを降りるときは、相変わらず「降り立った」という感じがする。社会人になる頃までに乗ったことがあった飛行機がたまたまどれもジャンボジェットと呼ばれる大きいものだったせいか、飛行機からターミナルビルに直接つながる通路を通るのが常だった。タラップをはじめて降りたのは、25歳くらいで地方空港をつなぐ小さな飛行機に乗ったときだろう。飛行機からタラップで降りると言ったら、大統領か海外のアーティストのイメージだったので、滑走路を通り抜ける風に髪を巻き上げられながら一人興奮していた。タラップを降りるときは今でもいつもそんな気持ちだ。

パスポートコントロールが見えてきて、シュンゲンエリア外に出ていたことを思い出す。すぐに順番が来てパスポートと滞在許可のカードを出すと、入国審査員におそらくオランダ語で何か話しかけられた。英語で聞き返すと、「オランダ語は話せないのか」と聞いてくる。「まだだ」と答えると、「まだか」と笑いながらパスポートにスタンプを押された。まだ全く話せないけれど今後勉強するつもりだという私なりの小さな意思表示だ。せめて、パスポートコントロールでは話せるようになりたい。あくまで小さな意思である。

荷物が出てくる回転台のあるホールでトイレから出てくると、ちょうどキャリーバックが回転台を流れているところだった。急ぎ足で人混みを抜け、キャリーバックを持ち上げる。到着ゲートを出ると、ホールにはいつものように出迎えの人々がいた。今日もスキポール空港にはたくさんの人がいる。どこかへ向かう人、どこかからやってきた人、そして誰かを出迎える人。空港に流れる空気は前に向かっていて心地いい。空港のエントランスホールから電車の来るホームに降りると、ほどなくしてハーグ行きの電車がやってきた。

オランダの電車は、いや、オランダだけではなく、イギリスも、ドイツも、電車は決まった停車位置というのがない。なんとなくホームで人が待っていて、停まった電車のドアの位置にバラバラと向かっていく。停車位置がないから、「電車が停車位置を過ぎる」という問題も起こらない。ドイツでは改札さえない。券売機かアプリで切符を買って電車に乗るだけだ。（改札がない代わりに切符をチェックする人がランダムに回ってきて、もし切符を持っていないければ罰金を請求される）機械がないことで機械のメンテナンスコストが

かからないし、改札で人がつかえるということもない。ロンドンの街中のバスの時刻表には時間帯によって「8分から12分に1本バスがきます」というような案内が書いてあった。

「定刻」というのがないから、「定刻に遅れる」ということも起こらない。日本の交通機関が「時間通り」ということで驚かれるのは、遅れないだけでなく、早すぎないからでもある。（オランダでは定刻より早くバスやトラムが通り過ぎることがある。日本も田舎ではそうなのかもしれないが）「決まった時刻を守る」「今ある水準を高める」という日本の良さもあるが、ゲームのルールを書き換えてしまう人が出てきたときに、その水準自体が意味を失ってしまうことがある。「イノベーション」と呼ばれるものを礼賛するわけではないが、人も資源も減っていく中で、基準自体を書き換えていくことはこれからの日本に必要なことではないだろうか。

そんなことを考えながら家に帰り着いて、廊下から寝室に続く扉を開けて天井を見ると、そこには火災警報器のようなものがついていて、これは私がここに住み始めたときからあったのだろうか。鳴るのが仕事の警報機だが、その存在に気づかずに静かに過ごしてることができたのはなんともありがたいことだと思った。2019.7.4 Thu 22:06 Den Haag

195. 話を聞かれない男

書斎の窓を開け、目を閉じた。カモメの声の合間に、微かにいくつかの別の鳥の声が聞こえてくる。右の側に窓があるので、目を開けているときは音が右耳からだけ入ってくる感じがするが、目を閉じると左耳からも音が入ってくるのが分かる。回り込んだ音に包まれ、中庭の一角にいるような感じだ。そうか、この書斎は中庭なのだ、と気づく。

ヨガを終えて白湯を飲みながら、昨日ロンドンで手に入れた本の書き出しを読んだ。

– If we don't have silence in ourselves – if our mind, our body, are full of noise – then we can't hear beauty's call. (Thich Nhat Hanh 著『SILENCE』より)

本を手にするということはその中に現在もしくは少し先の自分自身と何か響きあうことがあるということなのだと思う。”silence”の意味は、きっと本を読み進めるごとに深まっていくだろう。今の時点では、まさに冒頭の一文のように、世界の美しさを受け取るのに必

要な余白であり、私が「聴く」ことによってクライアントさんの中にsilenceができているのかもしれないとも思う。

ロンドン市内を走るバスの中で、大きな声でずっと運転手に話しかけている男性がいた。途中でバスの二階の席に上がったがそれでもなお、大きな声が聞こえてくる。男性はきつと、「聞かれない」経験をたくさんしてきたのだろうと想像した。一方的に大きな声で話し続ける人の声に、人は心を閉ざすだろう。当然、話している方は聞かれている実感が無い。そうすると余計に大きな声で話し続けることになる。結局どんどん人は分断されてしまう。聞かれるには聞くことが必要なのだ。しかし、聞くと、相手の考えを受け入れてそれに従わなければならないような気になることもある。聞いていて自分が話す番が回ってくるだろうかと不安になることもあるだろう。誰かに聞いてもらったという経験があってはじめて人の話を聞けることもあるかもしれない。そして、自分が話したことが相手に伝わったという実感は、相手がどう受け止めたかを聞くことによって感じるができる。聞かれたという実感を持つためにも、話すだけでなく、聞くということが必要なのだ。

「私はこう思います、あなたがどう思うかは自由です」というのは一見、相手の考えを尊重しているようにも見えるが、やはり心は分断されていくように思う。「今の話を聞いてあなたがどう感じたか教えてもらえますか」と聞けば、どちらの意見が正しいかではなく、相手を感じたという事実を受け止めることができるというのは、NVC（Non-violent Communication）を通して学んだことの中で、大切にしていきたいことのひとつだ。

思い返せば親しい友人やコーチたちは、私が十分に自分で考えを巡らせて尋ねたことに対して、考えを述べてくれる。「啐啄の機」とはこのことだろう。コツコツとつつく音が聞こえたときにタイミング良く何かを伝える、そして、それについてあなたはもう一度尋ねてくれる。アドバイスというのは相手のことを思っているようで、アドバイスをする側が自分の中に思うところがあるということも多い。相手を主語にしてあなたはこうじゃないかというその奥には、そう思うという自分の考えがあり、その奥にはその考えが生まれる背景がある。本当は「あなた」ではなく「わたし」の話なのだ。どんなに相手のことを想像したとしても、それは自分の世界観の中での想像に過ぎず、それを「あなた」を主語にして伝えられると、ときに相手はその世界観を押し付けられたようにも感じる。そして、アドバイスをされた側が自分自身が何かを乗り越えていけるという勇気や自分に対する信頼を失っていくこともある。（それはそれで、そう受け取る側の責任でもあ

るのだが) こうやって書きながら私は自分自身に言い聞かせているのだろう。誰かに自分の考えを押し付けていないか、相手が考えること、感じることを十分に聴いているか。

「人の振り見て我が振り直せ」という言葉があるが、バスの中で話し続ける人の姿から感じることは、今の自分自身への警鐘なのだろう。2019.7.5 Fri 7:13

196. 遅れたバスと漏れたオイル

ロンドン市内からルートン空港に向かう途中のバスの中で珍しく焦っていた。今は「時間通りにどこかに行かないといけない」ということはほとんどない。まさに飛行機に乗るときくらいかもしれない。しかし、焦ったところでバスの座席に座っているだけの私としては何もできない。

空港に向かうバスの停まるバス停についたのはバスの到着時刻の少し前だったが、20分以上待ってもバスは来なかった。このままだと飛行機に間に合わなくなると電車の駅に向かうとしたところで交差点の向こうからバスがやってくるのが見えた。「既に遅れているということは道路が混んでいるということで、その状況だと更に遅れる可能性もあるのでここでバスに乗っても間に合わないかもしれない」という考えがチラリと頭をよぎったが、地下鉄の駅まで行って電車に乗ることよりも見えているバスに乗ることのほうが魅力的に見えて、離れかけたバス停に引き返した。

地図上ではバスのルートは直線で引かれており、まっすぐな高速道路を通っていくのかと思っていたが、よく考えるとそんなはずはなく、バスは途中、まっすぐに引かれたルートの右へ左へ、大きくはみ出ながらいくつかの街を通り抜けて進んでいった。街中ではかなりスピードが落ちる。30分、20分と、ゲートが閉まる時刻への残り時間が短くなっていく。ネットが繋がらないので、万が一乗れなかったときに代わりの飛行機があるかどうかを確認することもできず焦りが募る。しかし、私が焦ったところでバスが早く走るわけでも、飛行機が待ってくれるわけでもないので、間に合わなかったらそのとき考えようと思っていたらようやく空港の方向を示す標識が出てきた。バスがバスターミナルに滑り込んだのは、ゲートが閉まる時刻の5分前だった。

「間に合わなかったらそのときはそのときだ」と思いながらもスーツケースを引いて小走

りに人の間を抜ける。幸いルートン空港は小さく、すぐにセキュリティチェックの場所に出たが、検査のためにスーツケースを開け、PCとオイルなど液体の入ったビニールポーチを出そうとすると、なんとビニールポーチが切れ、中に入れた容器の一つからドリンクに入れるために持ってきたオイルが出てしまっていた。どうやらオイルを入れていた容器の蓋が開いていたようだ。まだポーチの外には流れ出ていないが、このままでは荷物全体が油まみれになってしまう。どうしようかと考えながら、ひとまずは切れたポーチをそのままセキュリティチェックのケースに乗せ、自分自身もゲートを通り抜ける。ちょうど、何かを入れていたジップロックが空いていたので、切れたポーチごとジップロックに入れ、さらにそれをビニール袋で包んだ。旅の支度をしているときに「もしこのオイルが容器から出てしまったら大変なことになるなあ」とチラリと思ったのだが、まさにその手前のことが起こってしまっていた。PCや洋服につく前に気づけたことが救いだ。今後オイルを持ち歩くときは容器が簡単に開かないように口の部分にラップなどを巻き、その上で密閉性の高いジップロックに入れるのが良いだろう。しかしそれでも「万が一」のときのダメージの大きさが心配の種にもなる。そこまでして持ち歩くかどうか要検討である。

そんなことを考えられたのは飛行機に乗り込んでからだった。セキュリティチェックを抜けた後、パスポートコントロールらしきところでは係員が何のチェックもなしにどんどん人を通していった。去る者追わず、あっけない出国だ。小走りで係員の間を通り抜け、免税店の並ぶ場所を抜けて、ようやくゲートの案内に辿り着いた。まだ搭乗案内が出ている。急いで該当する番号のゲートに向かうと、長い列ができています。並んでいる人にアムステルダムに向かう飛行機の列かと聞くと、そうだと答えが帰ってきた。安心感とともに、少しの疲労と汗がやってくる。どうやら乗る予定だった飛行機の到着が遅れていたようで、暫くしてから搭乗が始まった。なるようにしかならないけれど、やはり、予定通り自宅に帰れることはありがたい。搭乗が終わり、扉が閉まった後も飛行機はなかなか動き出さず、そのうち開いた本を閉じ、目も閉じた。まどろみの中で滑走路を走る振動が伝わってきた。2019.7.5 Fri 7:46 Den Haag

197. 学びについての学び

17時を過ぎていたが、夜中のセッションに向けて仮眠を取り、オーガニックスーパーに買

い物に行った。思考力が0に近づいているというか、脳内の油を使い切ったというか、脳が溶けているというか、とにかく脳は休息を必要としているとともに脳内組織の再編成が行われているようだ。スーパーに行く途中、いつも通る、おそらく車の修理をしているお店の店先に大きめのパグのような犬が二匹寝ていた。（しかしパグはもっと体が小さいようなので別の種類の犬だろう）去年の9月にこの家に引っ越してきてから幾度となくその場所を通っているのに、犬がいることには気がついていなかった。どうやら思考力が低下していても（思考力が低下しているからこそ？）気づくことというのはあるらしい。スーパーのお兄さんがくれたパックのジュースを飲みながらぼーっと帰ってきたら、少しは頭が動き出した。今日はいつも食べているバナナを切らして、いつも飲んでいるバナナとカカオニブに豆乳をかけた飲み物を飲めていなかったのも、単純に糖分が不足していたのだろうか。いずれにしろ、かなりの脳エネルギーを使ったことに間違いはない。

今日は昼過ぎから、6月に出版された『インテグラル理論 多様で複雑な世界を読み解く新次元の成長モデル』監訳者である加藤洋平さんの出版記念ゼミナールに参加していた。加藤さんは私に日記を書くことを勧めてくれた人物でもある。書籍の中身に関する学びは来週までの間に改めて深めていきたいが、今書き留めておきたいのは、「学びについての学び」だ。今回、事前のガイダンスの中で「自分に合った学び方でいい」ということと「自分の学びのスタイルを一つ更新してみる」というチャレンジが提案されていた（と、私は受け取った）。漠然と「そうだなあ」と思っていたが、今日初回のゼミナールに参加してその意味を体感覚として実感し、今回自分自身のテーマとすることが見えてきたように思う。

まず気づいたのは、現在自分は比較的すぐに回答を得たいという思考がはたらくということだ。振り返ってみると、現在の読書も、3分の1くらいはまだ想像もしていない領域や考え方に会いたいという考えから、3分の1くらいは言葉自体に会いたいという考えからだが、残りの3分の1くらいは、何かに対する答えが欲しいという考えから行なっている。

（3分の1よりもっと多いかもしれない）しかし、どんなに本を読んでも、「何かに対する答えが欲しい」という気持ちは変わらない。これは、自分の探究心や探求テーマ自体が広がり続けているからという見方もできるが、一方で、自分の外側に答えを求め続け、自ら考えたり実証実験を行うことを放棄しているとも考えられる。この姿勢や物事との向き合

い方が変わらなければ、自分でより深く多面的に物事を考えられるようにはならないだろう。ゼミナールでは質問をすれば加藤さんがその場で回答してくれるが、自分自身でもう少し考えて仮説検証をする、もしくは仮説を立ててから後で質問をすることもできたのではないかと思う。同時に、自分が質問をするということは、誰かが質問をし、その答えを聞く機会を逃してしまうとも言える。そもそも今回私がゼミナールに参加している目的の一つは「自分とは全く違うバックグラウンドや考え方を持つ人たちの思考プロセスやディスカッションを通して自分自身が考え方を更新するため」だ。よく考えると、質問というのは、まさに現在の自分自身の思考の枠組みそのものである。自分が考え付く質問というのは、ある意味「想定範囲内」とも言える。他者の質問というのは、自分にはない思考を借りるということとも考えられる。まだ書籍のはじめの部分を読み始めたばかりではあるが、現在の自分がどういうことに興味や課題感を持つかというのはなんとなく見えてきた。それにそって掘り下げるといふ軸と、それとは全然違った他者の「視点」自体を学ぶという二つの軸が改めて今回のゼミナールのテーマになりそうだ。そのためにはできるだけ他者の視点に触れる必要がある。幸いにも公開されている質問を投稿するBoxを通して他の参加者が疑問に思っていることを知ることができるし、ゼミナールの中で他の人の質問自体に耳を傾けるといふのも大きな学びの機会になるだろう。こう書いている私は、その場で回答を得られることに安易に手を伸ばしてしまったこと、かつそれが自分自身の持つ仮説を確認する内容だったことに反省をしているのだが、それも実際に質問をしたからその中からこうして考察をすることができているのだろう。自分の仮説を確認する内容だったとしても誰かの新たな思考のきっかけとなっていることを願いたい。次回以降、生まれてきた疑問を自分の中であたためたり咀嚼したりしてみる時間を持つことを試してみたい。書籍の全体を読み通して見えてくるものもあるだろうし、ゼミナールが終わる頃に質問を書き込んでも遅くはないだろう。録音を後から聞き直すことはいくらでもできるので、リアルタイムでは疑問を解消することを優先させるのではなく、色々な刺激からその場で生成される思考を捕まえていくとともに、他者の観点を観察し、それ自体から新たな学びを得ることに重点を置きたい。2019.7.5 Fri 19:52 Den Haag

198. 見ないという選択

あんなに疲れていたと思っていた脳が、日記を書き進めるのとともに元気を取り戻してきているようだ。もう一つ学びについての学びを書き留めておきたい。先ほどは自分自身の

チャレンジとして行うことを書いたが、今度は、あえて今回はチャレンジしないことを考えてみる。チャレンジをできるように、体力を温存しておく部分と言ってもいいかもしれない。私にとってそれは視覚情報のコントロールについてだ。ゼミナールの前半では画像なしの音声のみの状態でやりとりがなされていたが、後半は画像をつけることが可能となり、私も画像をONにした。先日まで参加していたNVCの講座でも参加者10名以上が画像をつけた状態でやりとりしており、コミュニケーションについての学びを直接扱うという講座の内容上、画像があった方が講師の方としても安心ということだったのだが、私は普段コーチングセッションのほとんどを画像なしで行なっていることもあり、画像があると普段とは違うエネルギーを使ってしまうということを今回改めて感じた。

メラビアンの法則では、「話し手が聞き手に与える印象の55%は視覚情報から得たものである」と言われているが、これは言語情報などその他の情報だけでは情報が不十分であるという話ではなく、あくまで聞き手に与える「印象」という観点であって、「相手は言葉以外のことも見ていますよ」ということなのだと思う。一方で、音声情報のみでもかなり多くのことを受け取ることができる。言葉や発話構造だけでなく、声のトーンや間、トーンとはまた違った、声の響きのようなものは、ある意味、その瞬間のその人そのものなのだと思う。「全部分かる」という過信は禁物だが、心を澄ましていると、本当に色々なことが聞こえてくる。私の場合はそれに視覚情報が加わると、目から入ってきた情報と聴こえてくる情報を照合するのに無意識にエネルギーを使い、その結果、聴き取ることの濃度が下がってしまうような現象が起こるように思う。

同時に、相手に画像が届いているとなると「ちゃんと聞いているように見えるようにしなきゃ」という気遣いのような見栄のようなものも顔を出す。普段は目をつぶって、場合によっては胸に手をあてて入ってくる言葉を味わっていることもあるが「そんなことをしていたら変な人に見られるかもしれない」「相手に安心してもらわなきゃ」という気持ちも見えているという意識によって起こる。（きっと実際には相手はあまり気にしないのだろうけれど）同時に今日分かったのは、私は視覚情報があると、その範囲にしか想像が及ばなくなってしまうということだ。画像をONにしていた参加者は10名ちょっとだったが、実際には25名くらいの参加者がいたはずだ。先ほどの日記で触れた「他者の視点自体を学ぶ」ということについて、そこに自分とは全く違う視点や観点を持った人がいるというこ

とをいかに想像するかが重要になってくる。今の私にとっては見えないことがその後押しにもなる。

単純に想像力と情報処理のキャパシティの問題かもしれないが、視覚情報の処理には随分とエネルギーを使ってしまうので、それ以外のことに余力を残すために次回からは画像なしで参加をしようと思う。Zoomのいいところは、相手の画像が表示されていても、Wordなど別のウィンドウを出せば画像は気にしなくてよくなるところだ。Skypeの場合は勝手に一番手前に小さいウィンドウが表示されるので、勝手にそこから情報をキャッチしてしまう。聞くことと臭いを感じることは自分の意思とは関係なくある程度のことを受け取ってしまうある意味受動的な行為だ。それに比べて、見ることや話すことは自分の意思で能動的に行うことができる。しかし能動的に行うことができることも、その場の流れに任せたら受動的であることと変わらない。その場その場の目的に沿って、適切にエネルギーを配分するとともに、自分が無意識に持っているパターンとは違う形で向き合ってみることを続けていくと、学びの質も変わっていくだろう。今日もゼミナールの参加者同士で「本を読んでも結局習慣や行動を身につけていくことに至らないことが多い」という話が出てきたが、確かに自分自身に何か変化を起こしていくというのは簡単なことではない。自分にとって、この時間を通しての気づきは何だったのかということを探り上げていくことで、小さく、行きつ戻りつ、自分なりの歩みをすすめていけたらと思う。2019.7.5 Fri 20:45 Den Haag

198. 知っていると思っているところから離れてみると

過去の日記の編集を終えると、寝室の中はすっかり暗くなっていた。今日は日本時間の朝のセッションがあるのであと数時間は起きていることになる。そろそろ頭を休めておきたいが、学びについてもう一つ考えたいことがあったので書き留めておくことにする。今日振り返って今後の方針を検討しようと思ったのは、誰かが持った疑問に関係する知識や事前情報を自分が持っていたときにそれを伝えるか否かだ。気持ちとしては伝えたい。しかしそれが相手にとって、自分にとって良いことなのか。良いというのは、学びを深めるもしくは、双方が知りたい姿に近づくことに、中長期的に見て好ましい影響を与えるかということだ。内容にもよるのだろうが、まずはそもそも相手が本当に興味があることは何なのかというのはよく聴き取る必要がある。自分が「知っている」と思っていることほ

ど、相手が知りたいと思っていることはこういうことだろうと思込みが発生しかねない。本来であれば相手が何のために何を知らたがっているのかをきちんと聞く必要があるだろう。しかし自分が講師でもコーチでもない立場の場合、そこを突っ込んで聞くことには違和感を持たれるかもしれない。複数人でのディスカッションの場合、色々な人の経験や視点から話を織り重ねていけるのが望ましいように思う。そうすると、できれば自分自身の経験から実感としてあることをシェアし、それについてどう思うかと聞くのがいいだろうか。できれば一つの、こうだという見方ではなく、それとは違った見方もある可能性も提案できるといいかもしれない。そもそも少し聞きかじったような自分が伝えることと専門家が伝えることはその奥行きや広がりや全く違うだろう。とするとポイントは結論を1点に着地させないことになるかと思う。

何か具体的なことを進めていく場合は、「お互い違うことが分かってよかったですねえ」というところで満足してしまわない、具体的な創造をするプロセスが必要だが、特に今回のゼミナールのようにグループディスカッションの後に講師に直接疑問を投げかけられる流れにおいては、グループディスカッションでは結論を出すのではなく、問いそのものを参加者同士で深めていくことができればいいように思う。「最初に自分が持っていた問いよりもさらに深まった。だからこれはぜひ聞いてみたい」と思えたらそのディスカッションは「良かった」と言えるのではないか。それをゴールとしそこに向かおうとするのではなく、自分自身が生きた気持ちをそこに持ち込むというも大事だろう。同じ書籍を読んでも、目に留まる箇所、浮かんでくる疑問が違うというのが複数人で一緒に読み進める良さであり、その違いにその人独自の経験と視点が織り込まれ、それらを縫っていけばさらにいろどり豊かな問いが出来上がるに違いない。「問いを深める」というイメージで、次回のグループディスカッションには参加をしてみたい。

こうして考えると、どんな場も様々な切り口で実験や実践の機会にすることができるということに気づく。どんなテーマで臨むかは自分次第だ。そこに他者の気づきや前進への関わりも含まれると、人と共に時間を過ごしたからこそ生まれる価値が社会に還元されることになるだろう。2019.7.5 Fri 23:39 Den Haag

200. 私が日記を書く理由

気づけば日記に振ってきた番号が200になった。最初に書いた日記の日付は2019年の3月12日。それから約4ヶ月の時間を過ごしてきたことになる。

日記を書き始めたきっかけは友人に勧められたことだった。しかし、続けているのはなぜだろう。「オランダにいるのはなぜですか」と聞かれることがあるが、これに対して厳密には「オランダに住むことにした理由」と「オランダに住み続けている理由」がある。一般的には前者を聞かれていることが多いが、今の自分自身のことを伝えたいのなら後者も語る必要があると思っている。仕事も同じだ。「その仕事をはじめたきっかけ」「その仕事をはじめた動機」「その仕事を続けている理由」はそれぞれあるはずだ。人は基本的に、はじめた時点の話聞いてくることが多いし、話す側も過去の経緯を話すことが多いだろう。「なぜ今続けているか」について考えて言葉にする機会はあまりない。前置きが長くなったが、とにかく、「今、私が日記を書く理由」について考えてみる。

今、日記を書くことは私の暮らしの一部になりつつある。人と話をするということにも近いかもしれない。いや、もっと生きることそのものに繋がっているような気もしている。最初に書いた日記を読み返してみると、どうやら私は「発達の観点から成長を続けたい」というテーマを持っていたようだ。そのときもうっすらと「どうしたら成長をするかを直接考えても手に入れないものは手に入らないだろう」と考えていたようだが、今の私は「成長」を目的にすることは一旦手放しているように思う。

日記を書くようになって見えてきたのは、世界の美しさだ。美しさというと大袈裟で、「世界は小さな音や光、動物や植物、人の想いで溢れているということに気づいた」ということかもしれない。目にしている世界に気づけば自分自身の内面が反映され、それをもう一度取り込んで咀嚼し、また世界を見る。その間、思考は過去にも未来にも散歩に出るけれど、目の前の世界と何かを交わすことは、まさに「いまここ」にいるということだと感じられる。中庭の景色やその日の出来事を通して、その瞬間にいた自分を知る。一瞬で通り過ぎたはずの時間がいくつもの瞬間の積み重ねであったということを感じることができる。写真を撮ったらその瞬間に見た景色や感じたことをそこに閉じ込めることができるかもしれない。言葉にするとさらに、そこでゆらゆらと揺れ動く動的な自分を知ることができる。相

反するものを同時に抱え、割り切ることのできない自分。世界との境目はもはやどこにあるか分からず、「自分のことを考える自分」は何者なのかも分からない。それでもその瞬間に世界を感じていたという自分がいたということ、ただそこに置いていく。これはもしかしたら死と生、生と死の繰り返しなのかもしれない。

相変わらず私は好きなアインシュタインの言葉をよく引用しているし、中庭で遊ぶ小さい黒猫は小さいままだ。庭の木々の葉の色は濃さを増し茂っていつているけれど、半年もすればまた葉を落とし、元の姿に戻るだろう。小さな書斎の窓から見える景色は、結局ずっと繰り返されるだけかもしれない。そこに変化があろうとなかろうと、その中に佇み、その瞬間を味わっていく。それが私の生きたい生き方だ。だから私は日記を書く。

また数ヶ月すると、違う感覚を持っているかもしれない。そのとき今日書いたことはどんな風に映るのだろうか。「私が日記を書く理由」、それは心と同じで、移ろい、色や形を変えていくだろう。400番目の日記にまた書いてみたいと思う。2019.7.6 Sat 18:16 Den Haag